

## イエスのことば 第14回

「わたしの心だ。きよくなれ」(ルカ 5 : 13)

「人よ、あなたの罪は赦された」(ルカ 5 : 20、共同訳)

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、

罪人を招いて悔い改めさせるためです」(ルカ 5 : 32)

## □イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わすも、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架、復活、昇天

## □文脈の確認

1. 「承」の部に入っている。イエスが幾つもの出来事を通してメシアとしての権威を現わした時期である。
2. これまでに5つの権威を見てきた。
  - (1) 病の癒しに関する権威。カナでの「遠距離かつ即時」の病の癒しであった。
  - (2) 教えに関するメシアの権威。ルカ 4 : 32 は記す、「人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである」
  - (3) 悪霊に対するメシアの権威。イエスが人に憑いていた悪霊を叱って、一言「この人から出て行け」と命じただけで、悪霊は出て行った。
  - (4) 病気に対する権威。シモン・ペテロの義母を慢性的な熱病から瞬時に解放した。
  - (5) 自然界に対する権威。昼間に網を下ろさせて大漁、ペテロたちが5人の弟子がパートタイムの弟子からフルタイムの弟子へ。6番目の弟子としてヤコブが加わる。
3. 今回は、3つの権威を見る。
  - (1) ツァラアト患者の清めを通して、律法上の汚れに対する権威
  - (2) 中風の人の癒しを通して、罪の赦しにおける権威
  - (3) 取税人レビ(マタイ)を7番目の弟子とすることを通して、人に対する権威

## □本日のアウトライン

- A) 律法上の汚れに対するメシアの権威 (ルカ 5 : 12~16)
- B) 罪の赦しにおけるメシアの権威 (ルカ 5 : 17~26)
- C) 人に対するメシアの権威 (ルカ 5 : 27~32)

## A) 律法上の汚れに対するメシアの権威 (ルカ 5 : 12~16)

(1) 12 節 さて、イエスがある町におられたとき、見よ、全身ツァラアトに冒された人がいた。その人はイエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります。」

## ① 全身ツァラアトに冒された人

- □ ツァラアト=伝染性の皮膚病、または皮膚の表面に病変が生じている状態。旧約聖書では、人だけでなく、布や皮製品、家壁の表面に生じたカビ状のものについてもツァラアトとする。
- 人の皮膚病でツァラアトにあたるものとして理解されるのは、従来の病名で「らい病」、現在の病名では「ハンセン病」である。ハンセンとは、「らい菌」の発見者、ベルギー人の医学者の名である。
- ハンセン病は伝染力が弱く、現代では治療法も確立されているが、かつては不治の病として恐れられていた。
- 徐々に病状は進み、最終ステージでは急激な体重減少、体力の低下、慢性的な下痢やのどの渇き、高熱で苦しむ。最後には内臓や必須器官も冒され、死に至る。12 節の「全身ツァラアトに冒された人」とは、そのような最終ステージに達しているツァラアト患者である。

## ② お心一つで私をきよくする

- 当時のユダヤ教ラビたちの見解では、ツァラアトは神のさばきとしてその人に下されたものである。神のみこころを人が変えることはできないのであるから、人が治せるものではない。
- モーセの律法において、ツァラアトに冒されているかどうか判定するのも、また治ったかどうかを判定するのも、医者ではなく、祭司である。
- ツァラアトと判定された人は、家を出て所定の区画に隔離される。同時に、律法上「汚れた者」とされ、神殿に入ることや祭儀に参加することも禁止される。そして、道を歩くとき、他の人とすれ違うときには、「汚れている」と自ら叫び、他の人が自分に触れないようにする。
- 12 節で「全身ツァラアトに冒された人」が、イエスなら病気を癒やせる、ではなく、「イエスのお心一つで私を清くできる」と言ったのは、このような背景があった。ツァラアトが単なる病気ではなく、神のみこころによってでしか取り除くことのできない汚れとして理解されていたからである。
- イエスを、神から遣わされたメシアとして認めての信仰告白である。

- (2) 13節 イエスは手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐにツァラアトが消えた。
- ① イエスは手を伸ばして彼にさわり・・・イエスはひれ伏している人のそばにまで寄って行き、さらに身をかがめながら手を伸ばし、その人にさわった。全身ツァラアトに冒された人の身体に触れたのである。その人にとって、ツァラアトと判定され、家を出たあの日からきょうまで、彼にさわってくれた人はいない。今、メシアの手が彼に触れてくださった。
- ② 「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐにツァラアトが消えた・・・イエスのこのことばだけで、ツァラアトの病変が消え、その人は健やかな体になっていた。イエスは、汚れに対するメシアの権威を示した。
- (3) 14節 イエスは彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのため、モーセが命じたように、あなたのきよめのささげ物をしなさい。」
- ① だれにも話してはいけない。ただ行って
- すぐにでも家族や友人と会って話をしたいであろうが、モーセの律法、レビ 14 章にツァラアトに冒された者がきよめられるときの規定がある。今は、まずこの規定に従って祭司の判定を受け、ささげ物を捧げなければならぬ。
  - 彼をツァラアトであると判定したときの記録は、エルサレムの神殿に保管されていた。祭司はまずその記録を確認し、彼が確かにツァラアト患者であったことを確認したうえで、現時点での身体の状況を検査する。
- ② 自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのため・・・レビ 14 章の規定に従ってツァラアトに冒された者がきよめられたことを宣言した事例は、イスラエル民族に律法が与えられてから約 1500 年間、一度もない。これが起きたということは、イエスがメシアであるという明確なしるしである。しかもそれを判定するのは祭司、まさにイスラエル民族の指導者層に直接提示されたしるしである。
- (4) 15～16節 しかし、イエスのうわさはますます広まり、大勢の群衆が話を聞くために、また病気を癒やしてもらうために集まって来た。だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた。
- ① イエスのうわさ・・・かねてより病人を癒やし悪霊を追い出す権威をもってメシアであると思われるイエスが、ついに、全身ツァラアトに冒された人をきよめた、といううわさ
- ② 大勢の群衆が話を聞くために、また病気を癒やしてもらうために集まって来

た・・・民衆は、イエスをメシアであると認識しつつあった。史上初のツアラトキよめ宣言が起きたとの祭司の報告を受けて、ユダヤ議会サンヘドリンが、いよいよ動き出す。イエスをメシアであるかどうか、公式の調査を開始するであろう。観察・審問（質問ぜめ）・判定という3段階で。

- ③ 16節 だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた・・・イエスの宣教活動は、指導者層による公式調査への対応という次の段階に進む。この節目になすべきことは、祈りであった。

## B) 罪の赦しにおけるメシアの権威 (ルカ 5 : 17~26)

(1) 17節 ある日のこと、イエスが教えておられると、パリサイ人と律法の教師たちが、そこに座っていた。彼らはガリラヤとユダヤのすべての村やエルサレムから来ていた。イエスは主の御力によって、病気を治しておられた。

① パリサイ人と律法の教師たちが、そこに座っていた。彼らはガリラヤとユダヤのすべての村やエルサレムから来ていた・・・ユダヤ議会サンヘドリンから派遣された調査団が全国から集まってきた。まずは、観察段階。質問や議論は一切しないで、イエスの言動を観察する。

② イエスは主の御力によって、病気を治しておられた・・・イエスは、メシアとしての権威を調査団の前に示した。明らかに一般的な治療ではなく、神の力が働いて病人が癒されていることがわかるものであった。

(2) 18~19節 すると見よ。男たちが、中風をわずらっている人を床に載せて運んで来た。そして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとした。しかし、大勢の人のために病人を運び込む方法が見つからなかったため、屋上に上って瓦をはがし、そこから彼の寝床を、人々の真ん中、イエスの前につり降ろした。

(3) 20~21節 イエスは彼らの信仰を見て、「友よ、あなたの罪は赦された」と言われた。ところが、律法学者たち、パリサイ人たちはあれこれ考え始めた。「神への冒瀆を口にするこの人は、いったい何者だ。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」

① 友よ・・・原文直訳は、「人よ」

② あなたの罪は赦された・・・受動態で「罪は赦された」という言い方は、モーセの律法では、神が人の罪を赦すときの言い方である。ある人が他の人を赦すときには、受動態を使わずに、「わたしは、あなたの罪を赦す」という能動態で表現する。ここで、イエスは受動態で罪の赦しを宣言したので、律法学者たちはすぐに、これはイエスが自分を神として語ったのだと、理解した。

- (4) 22～24 節 イエスは彼らがあれこれ考えているのを見抜いて言われた。「あなたがたは心の中で何を考えているのか。『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」そう言って、中風の人に言われた。「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」
- ① イエスは彼らがあれこれ考えているのを見抜いて言われた。「あなたがたは心の中で何を考えているのか・・・調査団はまだ観察段階なので、一切発言しない。イエスの言動を観察しながら、心の中で思い巡らしている。
  - ② 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか・・・『あなたの罪は赦された』と言う方が易しい。その結果は目に見えないからである。しかし、『起きて歩け』と言うのは、その通りになるかどうか目に見えるので、はったりは利かない。こちらが難しい。
  - ③ しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」そう言って、中風の人に言われた。「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい・・・イエスは、自分がメシアとして地上で罪を赦す権威を持っていることを明らかに示すために、癒しの奇跡をして見せると宣言し、中風の人に、《起きて、寝床を担ぎ、【自分で歩いて】家に帰るように》命じた。寝床を担ぐこと、家までの距離を歩く条件まで加えられている。
- (5) 25～26 節 すると彼はすぐに人々の前で立ち上がり、寝ていた床を担ぎ、神をあがめながら自分の家に帰って行った。人々はみな非常に驚き、神をあがめた。また、恐れに満たされて言った。「私たちは今日、驚くべきことを見た。」
- ① イエスが命じたとおりに、中風の人癒され、起きて立ち上がり、寝床を担ぎ、神をあがめながら家に帰って行った。これを見た人々はみな驚き、彼らもまた神をあがめた。
  - ② 記されていないが、この結果、調査団は、ユダヤ議会サンヘドリンに対し、イエスが本当にメシアである可能性があるので、公式調査を観察段階から審問段階に進めるよう報告したことは明らかである。次の出来事において、調査団は質問を発するようになる。
  - ③ イエスは、審問段階に進むとわかっていながら、次の出来事では、調査団がイエスのメシア性を疑うであろうことを、あえて行う。それは、取税人という職業の者を救い、弟子に加える、そして取税人や遊女たちと食事を共にする、という出来事である。

## C) 人に対するメシアの権威

(ルカ 5 : 27~32)

(1) 27~28 節 その後、イエスは出て行き、収税所に座っているレビという取税人に目を留められた。そして「わたしについて来なさい」と言われた。するとレビは、すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った。

① 収税所・・・通行税を徴収する取税人の詰め所。

- ローマ帝国の徴税を請け負う取税人には、所得税（収入の一定割合）を担当する者と通行税を担当する者の2種類
- 取税人の報酬は、集めた金額から、ローマに納入すると約束した金額を引いた残金。多く集めるほど、取税人は富を蓄えることができた。
- 所得税を徴収する取税人よりも、通行税の取税人の方が、ひどい搾取をされると言われていた。

② 取税人の社会的立場・・・ユダヤ教ラビたちは、ユダヤ社会から彼らを締め出し、交際を禁じていた。このような措置を受けるのは、取税人と遊女（売春婦）。自然と、取税人たちは、取税人仲間と遊女たちとのみ付き合うことになる。

③ レビの新生（霊的な救い）

- イエスが彼に目を留めた。レビはイエスの視線を感じ、目を合わせた
- イエスが「わたしについて来なさい」と言われた
- レビは、すべてを捨てて立ち上がり、イエスの弟子となった

(2) 29~30 節 それからレビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。取税人やほかの人たちが大勢、ともに食卓に着いていた。すると、パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって小声で文句を言った。「なぜあなたがたは、取税人や罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか。」

① レビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした

- レビは7番目の弟子となった。
- 彼の喜びは大きかった。ユダヤ人でありながら、取税人という職業ゆえにユダヤ人扱いされていなかった彼が、こともあろうにメシアと目されるイエスから声をかけてもらい、新生し、弟子とされたのである。

② 波線部の「ほかの人たち」、「罪人たち」・・・いずれも遊女たちを指す婉曲表現。取税人ラビが催す宴会に参加できるのはいつも取税人仲間か遊女たち。このときもそうであったが、今回はこれにイエスと6人の弟子たちが加わった。

③ パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって小声で文句を言った

- ユダヤ教パリサイ派の規則と伝統によれば、取税人や遊女たちと食事を

共にすることは許されない。彼らにしてみれば、イエスがメシアであれば、取税人や遊女たちのような階層の人間とは付き合うはずがない。ということは、イエスはメシアではあり得ない、となる。

- このとき、調査団は観察段階から審問段階に入っている。調査団は弟子たちに質問した。「なぜあなたがたは、取税人や罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか」。この質問の真意は、「もしイエスが本当にメシアであるなら、取税人や罪人たちと付き合うはずはない」
- 調査団のパリサイ人たちには、取税人だったレビが霊的に救われ、大喜びしていることは眼中になかった。

(3) 31～32節 そこでイエスは彼らに答えられた。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」

- ① 医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です・・・パリサイ人たちは自分たちを霊的に健康な者、取税人たちを霊的な病人であると考えていた。そうであるなら、医者であるイエスが病人である取税人たちのところに行くのは当たり前である。
  - マタイ 9:13 『わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえでない』・・・別訳「わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない」。パリサイ人たちは律法に従ってささげ物をするということについては真面目であったが、律法の本質に立つことには消極的であった。あわれみの心を持つことなく、取税人たちを排除するいろいろな規則を設けた。
- ② マタイ 9:13 「とはどういう意味か、行って学びなさい」・・・よくよく考え直しなさい、という指示
- ③ わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです・・・パリサイ人たちは、自分たちを正しい人の範囲に入る者、そして取税人や遊女たちを罪人と見ていた。そこでイエスは言う。正しい人であれば、メシアによらずとも自分で神の国に入ることができる。メシアは、自分で神の国に入ることができない罪人を招いて、悔い改めさせて神の国に入ることができるようにするのである。
  - 実際は、正しい人は、イエスのほかは誰もいない。モーセの律法を完全に守ることのできた人は、唯一人、イエスのみである。
- ④ 公式調査は、観察段階から審問段階に進んだが、審問段階の最初でイエスと調査団は衝突した。このあとは、イエスの行くところ、どこにでもパリサイ人がついてまわり、イエスの言うことや行うことに対して、ことごとく否定的立場からの質問を仕掛けて来ることになる。